巻頭言

「立教」と「セント・ポールズ」

立教新座中学校・高等学校チャプレン　ベレク・スミス

築地の外国人居留地で1874年2月に10人以下の生徒を集めたチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教は、英語と聖書を教える授業を始めました。このようにして始まった私塾はウィリアムズ主教に当初より「boys' school」と呼ばれていました。1874年の年末にはすでに「立教」という名前が用いられていることが確認されていますが、ウィリアムズ主教自身は一度も「立教」や「Rikkyo」の学校名を使うことはありませんでした。

1873年に来日し、築地の仕事に最初から携わった執事のクレメント・ブランシェ（1874年6月に司祭按手をウィリアムズ主教より受ける）は1877年の手紙で、長屋を借りて授業を行っていた学校の校舎を「hut」（小屋）と呼んでいたと書いています。その長屋は1876年に東京の大火事で燃えてしまったのですが、築地でもう一度学校を建てることをウィリアムズやブランシェたちは計画していました。そこで、ブランシェは同じ1877年の手紙で「立教」について次のように述べています。「To ourselves its Japanese name, "Rikkiyō Gakkō," "Edifying School," seemed a much more appropriate designation」（我々にとって、日本語名の「立教学校」（徳を高める学校）は（英語の「hut」）よりふさわしい呼び名である、Spirit of Missions 1877/3、152頁）。

「立教」という名前の由来にはいくつかの仮説があります。『立教学院の歩いてきた道 Rikkyo Booklet 2』（5－6頁）で寺﨑昌男は主な三つの仮説について次のように書いています。

昔から信じられてきた第一の説は、アメリカからきた主教たちに、邦人の漢学教師だった古瀬清寧が、漢籍を基礎にして示唆したというものです。その漢籍は宋の時代にできて日本でも古くから親しまれていた『小学』で、少年のための修身作法書でした。その冒頭に「立教篇」という章があり、倫理や行いの初歩を語る名句が集められています。「立教」はその章名から取ったというものです。『立教学院八十五年史』（1960年）も伝えている説です。

第二は、ウィリアムズ主教自身が選び取った校名だというものです。北京語の祈祷書に「将立教師祈祷文」という祈祷文があり、それから取ったというものです。読みくだせば「将（まさ）に教師を立てんとする祈祷文」ということになるでしょうか。最近出されてきた説で、立教学院史資料センターの大江満学術調査員が元・東北教区主教・田崎安男師からの示教をもとに主張しており、『立教大学の歴史』（2007年）もこの説を重視しています。

他の一説として、1882（明治15）年立教が新校舎を建設したとき、工事を依頼された石工が「字のバランスがよい」と思いついて、校舎に「立教大学校」という字を彫りこんだという言い伝えです。だとすると、校名「立教」は偶然の産物ということになります。

どれが正しいか、結論は出ていません。

どれが正しいか、結論は出せないかもしれませんが、米国聖公会内外伝道協会が1912年に出版した『日本進歩の方向』では次のように書かれています。「Rikkyo is the Japanese name for St. Paul's. It means the "establishment of teaching," quite an appropriate name for a Christian school」。ここで「立教」を「establishment of teaching」（教えの確立）と説明しています。ブランシェが1877年の手紙で書いたことと照らし合わせれば、寺﨑昌男が述べた「第一の説」の可能性が高いことが分かり

ます。

しかし、「立教」という名前を一度も使った記録が残っていないウィリアムズ主教は、日本語の「立教学校」が定着したあとも必ず手紙や報告書には「boys' school」と書いています。ところが、1882年に一気に変わります。まず、1882年1月21日の手紙で女性宣教師のフローレンス・ピットマンが「St. Paul's」の名前で立教を指していて、同年の6月30日付の報告書でウィリアムズ主教は初めて「boys' school」ではなく「St. Paul's」を使用します。その時から一度も欠かさずにウィリアムズ主教の手紙や報告書では一貫して「St. Paul's」のみ書かれます。ポール・ラッシュが米国で資金集めの際に作成した資料ではSt. Paul'sが1882年に新校舎が建った同じ年に設立されたと米国の人々に伝えています。

ウィリアムズ主教を始め、宣教師たちにとって日本語の「立教」という名前は存在するものの、彼らの意識では「St. Paul's」という学校名であったことは間違いないのです。そして、この学校が単独に存在していたのではなく、日本国全体で行われていた伝道の働きの一環として存在していたことが名前からくみ取ることができるのではないかと思います。ウィリアムズ主教と彼と一緒に働いていた宣教師や医療伝道師たちは1879年に「St. Timothy's」という学校を大阪に設立していて、これは1873年に一旦開校したのち、1875年6月に人手不足で閉鎖された学校を立て直したものであります。また、1880年には伝道のための医療事業として築地に「St. Luke's」と大阪に「St. Barnabas'」を設立しています。いずれも新約聖書の使徒言行録で使徒パウロの同労者の名前であります。ウィリアムズ主教の考えでは、日本の教会を建てるためには教会だけを建てるのではなく、日本の方々に「practical benefits of mission labor」（宣教の働きの実用的な利益）を実感させる必要があると1858年9月30日の手紙で書き残しています。これは来日する前の手紙であります。その後、ウィリアムズ主教は英語を教えることを始め、日本人に役に立てるよう、様々なことを行いました。大阪や東京では当初は限られた場所に外国人が住み、事業を始めることが許され、それと同時に、ウィリアムズ主教は教会だけではなく、学校と医療事業を始めています。そして、全体を見た時に、使徒言行録にある伝道の働きをまねて日本中の都市に伝道をし、使徒パウロとその同労者の名前をそれぞれの学校や医療事業に付けたということであります。

さらに面白いことに、使徒言行録15章36－40節で使徒パウロと聖バルナバは同労者に関する議論で「意見が激しく衝突し、彼らはついに別行動をとるようになって、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ向かって船出したが、一方、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけた」と書いてあります。つまり、ウィリアムズ主教は意図的に聖パウロを東京に置き、聖バルナバを少し離れた大阪にある事業の名前としたのだと推測できます。

しかし、何よりも、「St. Paul's」、「St. Timothy's」、「St. Luke's」、「St. Barnabas'」の名前からくみ取れるのは、ウィリアムズ主教が教会や学校だけを設立しようと思ったのではなく、伝道の働きのためには学校と医療事業の両方が協力しあうことによって日本の人々に働きかけようとしていたことが分かります。本来は、この大きなヴィジョンの中に立教が存在しているのであります。そして、建学の精神を正しく理解するためにはこのことをまず理解しなくてはならないのではないでしょうか。「立教」という名前は「St. Paul's」より先にある名前ですが、ウィリアムズ主教の精神をよりよく表しているのは「St. Paul's」ではないでしょうか。そして、何よりも、立教の日本における目的は他の学校との競い合いをすることより、日本人にキリスト教の実践的な祝福と実りを与えるためではないでしょうか。そのためには日本の人々に役に立つこと（仕えること）をもう一度覚えて今後の優先順位やヴィジョンを探っていく必要があります。